

講演

大学史編纂事業の現状と課題について

寺崎昌男

(頼委員長)

近年は大学史の編纂状況等も変わって参りました。幹事会でもこのように研究会を開いて、学内外の先生方をお招きして、いろいろ情報交換とか先輩たちの知恵をお借りして、より良いものを作ろうということになりました。先回は私が過去のつらい思い出を話しました。今日は本格的な研究会ということで、日本の高等教育研究の分野では大先輩でいらっしゃる寺崎先生をお迎えして、今回このように研究会を持つことができました、非常にうれしくありがたく思っている次第です。先生のご紹介はまた後でいたしますけれども、今日はゆつくり時間を取っていただいて、ご歓談頂いたらと思っております。以上をもって最初の挨拶に代えさせていただきます。

(小宮山室員)

それでは本日はお迎えいたしました寺崎先生のご紹介を、編集室の小宮山の方からさせていただきます。

寺崎先生の御業績を考えますとまことに簡略な紹介で恐縮ですが、寺崎先生の御経歴と主要著作を一覧にしてお手元にお配りしています

ので、参考にしていただきたいと思います。

寺崎先生は、大学院の頃より大学史を研究のフィールドとして選択されておりまして、大学史研究を教育史の中に位置づけられたという点が、大学史研究の第一人者といわれる所以だと存じております。特に主要著作の二番目にあげました『戦後日本の教育改革 九「大学教育」』という先生の御著書は七〇年代以降の大学史研究には必ず取り上げられるという大著であります。

個人的なことで恐縮ですが、私は先生には三年前に大学院の集中講義で、お世話になりました。先生が大学史を専攻されるようになった頃のお話について、おもしろおかしく聞かせていただいた記憶がございます。

さて、今回は「大学史編纂事業の現状と課題について」という講演題目で、この寺崎先生の楽しいながらも意味深い御講演をお聞かせいただけることと思っております。

(三澤室員)

それでは、研究会の方の司会は、大学教育研究センターの羽田幹事

の方をお願いいたします。よろしく願います。

(寺崎昌男氏)

寺崎であります。今日は存じ上げている方が半分ぐらいいらっしゃいます、非常に話しづらいのですけれども、肩の力を抜いてお話をさせていただきます。

頼先生、お懐かしうございます。『広島大学二十五史』が編集されてきました一九七三年に、私は大学教育研究センターに、流動研究員として半年滞在しておりました。頼助教授と、寄田啓夫助手が、二人でしこしこと寂しげにやってらっしゃったのを覚えております。大学教育研究センターは編集室のすぐそばの図書館の三階でしたのに、センターで年史の話が出たことは一度もありませんでした。他の先生と話しても、ピンと分からない。寄田さんに会うというつもりも、「おおごとだ、おおごとだ」と言って駆けまわっておられるという状態でした。しかし頼先生がおっしゃいましたように、最近では年史を作るという事業のステージが変わってきたつあると思います。これまでの体験も踏まえながら、お話を聞いて頂きたいと思っております。

実はもともとこの仕事は「得になる」仕事ではありませんでした。いろんなめぐり合わせでこの仕事に巻き込まれ、逃げよう逃げようとしたのにいつの間にか捕まったという方が多いのです。また例えば、助手の人が工学部の研究室に資料を貰いに行ったりしますと、「何やってんだお前今頃」って言われるわけですね。「俺たちは今日明日のこの研究で忙しい。二十年前の資料出してくれなんてことをやってるか

ら人文社会科学は遅れるんだ」という様なことを言われて頭に来て帰ってくるというような、だいたいそんな作業が続くのです。ところがそれだけではないというのが、今日言いたいことです。この仕事の意義は今やそれだけじゃなくなってきたという事です。

### 大学史編纂小史―伝承からの出発

はじめに、日本で大学史編纂がどういうふうに進んできたかというのを、大まかに駆け足でたどってみます。戦前は、歴史研究としては認められなかったことでした。言うなれば実証以前という状態が続きました。

日本で最初に大学の沿革史が登場してくるのは、だいたい明治四十年代くらいからです。例えば、古いものでは『早稲田大学開学二十五年記念誌』という冊子が出ております。東京専門学校として早稲田が出来たのが明治十八年でしたので、それから数えて二十五年目の明治四十三年に出てるんですね。記念誌でありますから、広告もいっぱい載っておりますし、中身は決して歴史だけではありませんけれども、これなどは最初のもの一つでございます。この後で『半世紀の早稲田』というのを大正の後半に出すことになるわけです。この早稲田よりももうちょっと早く年史を出したのが『慶応義塾五十年史』であります。明治四十年刊行ということになっております。安政年間の開校ですから、それから数えてちょうど五十年です。

これらの特徴は何かと言いますと、ほとんどが今で言うオーラルヒ

ストーリーだったことです。諭吉先生の話聞いたとか、大隈重信や新島襄といった創設者と親しかったとか、こういうふうな人たちが職員として大学に残っている。その人たちが昔からその学校の先生をやっていた方たちいろいろな聞きながら、手元にある資料をともかく集めて本にするというのが、通例であつたと見られます。それだけに悪いところばかりじゃありませんで、当時しか使えないような資料が大いに使われておりますし、伝承のようなことも、ふつと面白く書いてあるわけです。

一例だけ申しまして、例えばいくつかの私学は大抵、卒業さえすれば中等教員の免許状を無試験検定で取らせるといふ特典を受けていたわけです。東洋大学とか國學院とかという学校にとってみればそれはものすごく大事な特権の一つでした。慶應義塾はそれを受けたんですけれども、一年か二年後にさつさと返上してしまう。学校があんな特典など貰うと、カリキュラムが全然自由に組めないというので、さつさと返上してしまつた。そんな事情がはつきり書いてある。そのほかトピックがずらりと並んでおりまして、例えば、「慶應義塾命名の由来」次に「起源及び沿革」というのがあるかと思うと、その次は「同窓会の成立とその後の発展」とかいつて同窓会史が最後まで書いてある。また慶應義塾社中の「社中社頭、塾長の新任」「英語演説会」といった内容が、三百頁足らずの本の中に百二十項目あがつている。そのトピックの一つ一つは全部、今読むと非常におもしろい。そういう特徴をもっております。

これに対して昭和に入つてくると、官学中心に比較的きちんとした

制度史が出来て参ります。思うに、一番典型的な制度史は、徹底的なクロノロジーで書いた『第一高等学校六十年史』でしょう。これは「概説」がちよつとあるだけで、その概説の後ろには全部明治三十五年何月何日に何をしたといった調子で項目が並んでいるわけです。例えば文部省との間にこの時にこんな往復をやつたといったことが載っている。その次また明治三十五年七月何日の往復が載っている。徹底的なクロノロジーです。ただ、今になってみるとこれは、意外に使いでがございまして、そう載つていけば、それを手がかりにして文書を探すことができるわけです。この編纂の中心になられたのが藤木邦彦先生です。これをみると、ほんとに東大の国史学の史料編纂的なディシプリンにきちつと則つているということが分かります。ただし概説の部分になりますと、これはもうかなり大時代な好き勝手なことが書いてあります。例えば、この年に第一高等学校は校旗を定めた、これを「護国旗」と称した、というようなことが特筆大書されています。同じような特徴は『東京帝国大学五十年史』の方にもございまして、これも非常に周密に大久保利謙助手と平泉澄助教、それから服部宇之吉委員長、それに西洋史の村川堅固先生なども入られて作られたそうですけれども、ある箇所はものすごく忠実に資料を起こして抑制した筆で書かれているかと思うと、天皇皇后両陛下の臨幸・台臨等が事細かに書かれているといった、いろんな点がごちゃごちゃになつて入っている。ただし、わずかにそういう官立学校沿革史の中に戦前の国史研究のディシプリンが入つてきているという感じですね。

それが戦後少しずつ変化してきました。戦後の第一期というのは一

九六〇年代の末ぐらいいまで、つまり大学紛争の前までぐらいいだと思いませんけれども、この時期に少し傑作がでて来るんです。第一の傑作は東北大学だと思います。「東北大学五十年史」は非常に良くできておりまして、文章も大変よく練られております。これをなさったのは日本社会史研究の中村吉次先生で、委員長でした。そしてその腹心として働かれたのは国史の先生じゃありませんで、原田さんという、当時図書館に務めてらっしゃった方なんです。最後に助教教授になって辞められました。辞められる直前に会いに行っただんですが、東北大学の歴史に関しては大変詳しい方でございました。日本史出身でいらっしやっただんですが、ずうっと年史のことだけをなさった方でした。この方が通史を中村先生たちと一緒に書いてらっしゃいます。杜の都仙台のなかに出来たという創立の前後から、戦後の改革、それも師範学校と一緒に入れた大変な改革をやり、その間にいろいろな事件が起きたわけですが、大変良く書いてあります。私がドクターコース在学中にあの東北大学史は出ましたものですから、買いたくて仕方がなかったのですが、非常に限定した販売数で、買えないんです。やっとな数年前に古本屋で出たのを買いましたけれども、大変な値段になっております。しかし、良いものです。当時、ああ個別大学の歴史書って面白いなと思ったのはあれしかございませんでした。後から聞いてみますと、中村先生たちが各学部の編纂執筆等々の委員たちと相当きちんと連絡を取られて、それから資料の裏付けも原田さんがなさって作られたようです。今東北大学は国立大学で唯一、学内措置で沿革史の記念資料館が出来ている学校であります。

もう一つ付け加えるならば、出来はあまりいいとは思いませんが、慶應義塾の百年史。これは長い間かかって、確か、付録も入れて全六巻でしたか、これが出ました。ただし第一巻が福沢諭吉賛歌みたいな流れで、第二巻以後が制度史なんです。とたんに面白くなるというところで、巻数が多い割には、六〇年代末までに出たものの中ではあまり感心いたしません。

### 編纂の本格化―七〇年代以後

第二期すなわち七〇年代の半ば以後になって初めて、大学沿革史に本気で取り組もうという学校が徐々に生まれてきたんです。私自身の経験から申しますと、一九七四年四月に立教大学文学部の助教教授になったのですけれども、そのちよつと前、一九七〇年から非常勤講師をやっておりました。その時に、メンバーに招かれました。大久保先生などもかかわっておられたんですが、海老沢有道というキリスト教史の先生が中心でした。この時、海老沢先生ははっきりと、大学沿革史は本格的なものをつくるというのが前提だ、つまり、全員が論文を書くと思って取り組んで欲しいとおっしゃるんですね。これまでの沿革史を見ると、出典註もなにも付いていない。どんどん付けてかまいませんという話でした。私は張り切りしました。当時、まだ若かったことでもあり、初めて具体的大学沿革史に参加したものですから、「『立教大学』における大学への道」という、論文のような章を、教育史のことも全部思い切って入れて、書かせてもらいました。それは大変印象に残っ

ております。本当に研究論文を書くようなつもりで、書くことが出来  
ました。

そのあたりから、他の大学で、たとえば獨協や明治学院のように、  
資料集を出すところが出てきました。紀要の刊行には早稲田がちょっ  
と早くから取り組んでいました。『早稲田大学史記要』という紀要が  
出ておりました。その後私学がリードして、資料集を出すという動き  
も出てきたんです。七〇年代後半から八〇年代になりますと、もう、  
いろいろな学校が、何年史紀要というのを刊行するようになって参り  
ます。そうなるといよいよ、沿革史の研究ベースが広く深くなって参  
りました。これからの動きが沿革史編纂を脇から支えていったように  
思われます。

七〇年代半ば以降、いろいろな学校が沿革史、年史を出したんです  
が、やっぱり一番本格化したのは、しばらく後の八〇年代末以降ぐら  
いからじゃないでしょうか。東京大学の百年史がちょうどこの時期に  
出ましたし、九州大学も出ました。それから同志社大学といったこと  
ろが出ました。最近はいろいろな国立大学が年史編纂を出発させてい  
らっしゃるわけです。静岡大学が一昨年、金沢大学が昨年、そして京  
都大学はやはり一昨年、それぞれお訪ねしたことがあるのでよく知っ  
ている所だけあげたんですが、こういうところがいろんな形で大学沿  
革史を作っていらつしやるわけです。作り方とか金の集め方、それか  
ら体制の作り方はまちまちです。けれども、それぞれの形で特徴のあ  
るものが出てくるように思います。静岡大は戦後新制大学になってか  
ら、たった一冊『静岡大学十年史』というパンフレットのようなもの

が出ただけです。金沢もそうでした。ところが本格的にやってみよう  
と思う段になると、両大学とも大変なわけです。どうしてかという  
と、こういう大学は、包摂学校史があるからです。『広島大学二十五  
年史』の時のように、包摂学校史前史のところ、十年史のとき本格的にや  
られているといいんですが、やられていないんですね。金沢だったら  
金沢医科大学の歴史はあるわけです。それから、医学部の歴史と称す  
るものは出ている。けれどもそれらが金沢大学という一つの大学のな  
かに包摂されてくるような形でその歴史が整理されてはいない。調べ  
ようと思ったら、金沢だったら第四高等学校までさかのほらなければ  
ならない。そっちの方はそっちで、恐ろしい旧制高等学校のおじさん  
たちがいるという訳で、なかなか難しいですね。でも、調べていか  
ざるを得ない。金沢と静岡はどちらも本格的にはじめなければいけな  
いという苦しみを背負っていらつしやる。

京都大学は七十五年史が昔出ました。あのときに京都大学をお訪ね  
したことがあるんですけども、ちょうど紛争の後でした。飛鳥井雅  
道先生が中心で、教育史の方を含め三人ぐらいが中心になって進めて  
いかれたわけです。その時期はまだ、大学がいろいろときな臭いころ  
でした。例えば大事な事件を取り上げるにしてもいろんな配慮が要っ  
たようです。あの滝川事件についてすら、当時の『朝日ジャーナル』  
の座談会記事に対して、小西重直総長のお弟子さんに当たる先生から、  
非常に強い反論が出るというようなことがありまして、なかなか自由  
に出来なかつたようでございます。

結局、『京都大学七十五年史』は概説編と、部局編と、その二つを

合冊にしたのと、三種類出てるわけです。概説編だけは全教職員に配られました。しかし、全部を纏めたものは、ごく限られた部数しか出なかったようですね。出し方については、いろいろ苦労されたようです。

聞いた話で忘れられないのは、例えば評議会の議事録を、やっと思いで、兎に角見せてもらったらしいんですけども、今言った三人しか見せてもらえなかったということです。そしてコピーも筆写も許されなくて、確認することだけができたという苦労を語っていらつしゃいました。私はそのころ財団法人野間教育研究所というところにおり、京都大学の評議会記録を見たいと思ってさんざんアプローチしてみたんですけども、とうとう駄目でした。そういう時代だったんです。

ところが今は、京都大学はそんなことはなくて、かなり大規模な形で進めていらつしゃいまして、この前、写真図説が出ましたが、それはもうちょつと発展させればおそらく新しい京都大学史ができるだろうな、というほどの、国立大学の図鑑の中では抜群におもしろい出来栄えです。あのエネルギーが続いていけばいいと思います。

私立大学も最近充実してきました。東洋大学は、私が数年前から専門委員として協力させて頂きまして、概説部分の全部を、中野実さんという東大の助手やつてる人と二人で協力して、寄稿しました。全十巻本で、資料編から出していくというところで完成いたしました。ここも教育史上非常に有名な事件、「哲学館事件」というのを起こした大学ですけども、徹底的にその辺りを調べておりますので、私学の大学史では第一級品に近いんじゃないかなと思っております。

早稲田は昨年完成いたしました、賑々しいパーティーが開かれたんです。けれども私はこれを読んで作品としては今いちだと思えました。あれぐらい大きくなって、それを通史だけでやっていくとなると、ばらつきがどうしても出てくるんですね。ある部分は愛校心に駆られた名文で書いてあるかと思うと、あるところは、ただ淡々たるおもしろくない制度史が書いてあったり、ばらばらです。ただ佐藤能丸先生という方がこれをもとにして御自分の著作を書いてらつしゃる。そのほうは非常におもしろい。やっぱり、早稲田らしいなという印象を持つんですね。

話はずれますが、いろんな大学の大学史を読んだり、参加したりして感じます。どういう沿革史ができるかというのは、実はものすごくその大学の姿を反映するんです。本当に正直だと思えます。編集組織の作り方、進め方、完成のさせ方、それから出来具合、こういうのに全部その大学の顔が反映していくように思います。だから、へたなのを書いたら恥ずかしい、という時代がきているように思います。つまり、相互に批評をするという空気も生まれてきたのです。

今、大変元気のいい年史を出しておられるのが、明治大学です。明治大学は近代日本の法学教育、ならびに近代日本の政治史のなかに明治大学を位置付けるといって、非常に強い発想で書いておられまして、これは元気のいい、しかもかなり実証的な研究で、もう本史も刊行されてます。

中央大学もものすごく実証的に資料の刊行からはじめていらつしゃるようですね。例えば東大で見つかった簿冊の中に、中央大学

の歴史に関するものがあつた、というような場合は、その簿冊の關係箇所を全部あつめ編成して資料集に収めるとか、制度史の史料刊行を継続するのかなさっています。

### 東大百年史の経験

さて、私自身の経験にポイントを絞っていききたいと思います。

まず、東大でのことであります。そこにいらつしやる羽田さんにも学外から協力して頂きました。後で羽田さんに私のわからないところがあつたら補って頂きたいと思います。

先述しましたように一九七四年に立教の文学部助教教授になつていたのですが、その翌一九七五年から学外専門員を頼られました。確か九月ぐらいに、林健太郎総長から辞令がきまして、第何回目だかの全学の編纂委員会に参加して欲しいという招聘状もきたものですから、行つてみたんです。学士会館の大会議室で、本日の研究会の三倍ぐらいの人数が集まつておられるわけです。編纂委員長は笠原一男先生でしたが、朗々たる声で大演説をされました。これから三年間、資料収集に専念する、そしてそれ以後二年間で仕上げる、については編纂方針はこれこれだ、というようなことが言われました。それに対して薬学史をやつてる先生が、もう少しこういうことが必要じゃないかと、コンピュータの導入が必要ではないだろうか、というようなことを言われると、笠原先生がいや、コンピュータというのはそもそも人間の思考力を奪うものであるとか、そんな話が大量の教授たちが集まつたと

ころで出ているわけです。私はこれを目にして、あと四、五年で終わる仕事ではないのではないかと思つていたんですが、結局終わったのは、十二年後でした。あの頃に思つたのは、こういう作業は、時々大がかりな会議をするのはいいけど、しょっちゅうやっちゃいけないということですよ。普段はもうちよつと違う格好で推進していかないと駄目なのです。

その笠原先生はその翌々年の一九七八年度迄で退官されました。当時は東大の中は大変荒れておりました。学内に学生間の紛争も絶えず起こつておりました。百年記念事業をやるということはそもそも犯罪的なことであり、そのなかで百年史を編纂するのか、というふうな意見が度々出ていました。一九七九年の三月に笠原先生は定年退官されたんですが、その最終講義の一週間前に、数百人の聴講生の中から、東大百年史に対する質問が生まれてもうちよつとで、缶詰にされるどころだった。それで次の週最終講義が予定されていた時間に、笠原先生は、いや何と言われてもやると言われたそうですが、職員の人たちに押し止められて、最終講義がいわば「粉碎」されてしまった。そういう時代だったんですね。

立教も荒れていました。そんな時期でしたから、年史完成が延びたのも止むを得ないことだったと思います。

その後、古代史をやつておられた土田直鎮先生が次の委員長を引き受けられて、その辺りから、学内情勢も編纂体制もだんだん落ち着いてきました。そして私はなまじ東大教育学部に戻ってきたばかりに、とうとう最後には編纂委員長にさせられたということになるわけでご

ざいます。その東大の十年前後にわたる思い出の中から一般化できる大事なことは何だったかということ、整理してみようと思います。

### 推進グループの必要性

ひとつは、推進グループというのが出来ないことやっぱり無理だということ。全学的規模でなくてもいい、あるグループをきちつと作って、そこが先に立ってやって行く、という体制をどうしても作って行く必要があると思います。

東大の中では、日本史をやっていた伊藤隆さんと、古代史の益田宗さんと、建築史の稲垣栄三さん、それから教育史の私と、この四人が土田さんのものと言わば推進グループという役割を担って、結局のところ最後まで編纂を支えました。全学のムード作りという面でも、このようなグループの存在は不可欠です。

他方、専門家の協力も必要です。たとえば建築史というのは多くの場合なかなか参加してもらえないらしいんですが、東大の場合は幸い建築学科があって、その中に建築史の講座があったものですから、良かった。キャンパスの歴史とか、校舎のつくり方の歴史とか、要するにハードの面の歴史は、そういう方がいらっしやらないと、とてもじゃないけど覆いきれない。例えば安田講堂を中心にして東大の本郷キャンパスは出来上がってるんですが、ああいう配置のことを何というのか私たちは知らないわけです。それを表現する専門的なチームを知らない。ところがあの配置は、見る人を見ると、フィロソフィーが分

かるそうであります。私たちは言葉を知らないものだから、駄目なわけです。また建築の先生なら常識で知っておられる「擬ロココ風」なんて言ったって、何のことか分からない。大学史はやっぱり、いろいろな専門の方に協力を仰がなくてはならない。もともとそういう領域なんです。かといって、それを仰いでいるだけじゃいいものは出来なくて、推進グループが要る。この二つの面がどうしても必要になってくれないかと思えます。これが第一番目のことです。羽田さんは当時、福島大学にいらっしやったんですけれども、財政のことはいくら教育史をやっても私どもには分かりません。日本でたった一人の専門家がおられるからお願ひしましょう、と薦めて、学外執筆委員という名前ですべて最後まで御協力頂きました。これも専門家の協力の一つでした。

### 部局との関係をどうするか

もうひとつは、学部の問題があります。これを取っばらつていくのはおおごとで、年史ごときで取っばらえるようなものではないんですが、できるだけ壁を低くしながら協力していく、という体制を、何とか作っていく以外にないように思います。

東大の場合も、例えば法学部史というのは年表で作っているわけです。ほかの学部は全部通史を叙述してあります。法学部史だけが年表、年譜風のものを作ったわけです。それはそれで行くということになっていました。その代わり結構工夫はされております。いい加減なもの



ではなくて、教授会記録と全学記録と一般事項とを合わせた年表を作ったわけです。それをその時その時の『国家学会雑誌』に次々に発表して行って意見があったら言ってくれ、という方式を取りました。

助教授の人たちが専門でもない仕事を割当てられて、ぶつぶつ言いながら年表材料を探しに編集室に来てたんですけれども、出来上がったものは結構優れていて、誰かが人柱になるということにはなかったんですね。たいへんな組織力だと思いました。そういうやり方はそういうやり方で認めていくという方針を採っていたので良かったんです。あれをねじ伏せて、全部通史で書き下ろして下さい、という方針で揉めてたら、部局史第一巻は出来なかったかも知れません。そういう点では部局とのある程度の妥協が必要で、しかも、その妥協の中で壁を少しずつ払っていく作業をしていく必要があると思います。

別の観点で思い出しますのは、工学部のような金持ちの学部ですね。あれはもうバチッと部屋を作って、ちゃんとその部屋にアルバイトの人を置いて、堂々と進めました。私どもが口を出す必要はない。

経済学部はその前に極めていい年史『東京大学経済学部五十年史』を作っていたので、これがベースになったんですが、百年史の時も相変わらず熱心でした。特に戦前に危ない事件をいっぱい抱えたのが経済学部でした。大内事件や河合事件の資料などは、非常におもしろくて、例えば河合事件では、河合氏の著作に関する批評を総長がいろいろな教授たちから集めているわけです。朝憲紊乱に当たるかどうかとか、不敬罪に抵触するかといったものです。一番恐いのは同僚だということが良く分かります。それらを踏まえた通史づくりが行われ、そ

うとうな内紛だったことが丹念に読んでいけば分かるわけです。

ただ、編集に関して、全学の必要性和学部の必要性というのをどこで両立させるかという微妙な事が起こって参ります。同じ事件のことを、通史で書く、学部でも書く。こうなつた時に矛盾が起こる可能性があるわけですね。それはどうしたらいいかということなんです。学問の自由に関わる事件にしてもスキヤンダルにしても、通史を書く人間は書かざるを得ない。ところが、その舞台は、ある学部である。こういう時にどちらの叙述を、同じ年史の中で優先させるか、という様なことは、ルールを決めておかないと、かなりややこしい話になると思います。

東大は完璧に二つに分けました。我々は部局史には一切口を出さない。その代わり、部局も我々の通史には同様にして頂きたい。ただし、資料はお互いに協力しましょうと決めたので、大内事件、河合事件のようなことについての資料を、提供するということができたわけです。しかし、この点は非常に苦しいところです。いわゆるきわどい事件ほど、実は通史でどう書くかということと、当事者を含む部局は何と書くかということと、この間の矛盾は大きくなってくるわけです。これはルールを最初に決めておくべきことです。そういうルールはそれこそ大委員会で決めないとまずいと思います。大委員会で議論されたほうがいいと思います。

## 事務局の協力が必要

もう一つは、事務局の協力が大事だということです。これは申すまでもございませぬ。特に国立大学の場合はこれがなかったら作業が先に進まないと思います。例えばさっきの評議会議事録のようなものですが、大幅な活用と筆写、それからそれを使った叙述、この重要性を認めてもらわないことには、駄目でした。これからだんだん大学関係の史料はオープンになっていくと思えますけれども、文書史料についてだけじゃなく、場所の提供、その他の便宜のはかり方、お金の運用、その他諸々、事務局の熱心な後押しがなくなっちゃ前に絶対進まない。例えば、「編纂室だより」というようなものを出すこと一つにしても、実は、教員だけで出せるものではないんですね。金沢大学の場合ですと、「ニュースレター」という編纂だよりが出てるのですが、そのアレンジメントと入力は全部ある事務局の人がやっていきます。そういうレイアウトなどの好きな方がいらっちゃって、自分からやりますと言ってくれるので、全然金がかからないで出せるんです。例えばそんな協力がある。そんなわけで、事務局の協力は致命的に大事であります。東大の時も私も幸いに大きな協力を受けました。

## 校訂作業は不可欠

最後は校訂作業の大切さでございます。全員が出した原稿を、何処

からも文句を言わせず書き直すことができる体制を作っておかなければいけないということでもあります。

細かいことになりましたが、皆ものを書くときは、やっぱり最初は気合いを入れるわけです。「もともとこれはこうこうであつたが、新たに何々学部創立の動きが起きた」というような話を前のことからずうつと書きたくなるんですね。そこはバサツと切らないと駄目なんです。切らせてもらえないことになったら、おおごとでございます。なまじ偉い先生に頼むと、一筆たりとも手を入れてはならぬ、なんてことを言われたりしかねない。だから、それを言わせないという体制を作っておかなければいけない。「第一次原稿に関して著作権はないものと思つてほしい」ということを私たちは言いました。その代わり提出された原稿はその人の著作であることは間違いないのだから、それはそれとして、例えば、「第何編、第何章、第何節から何節までは全部あなたがお書きになった、こういう証拠はちゃんと取っておく」ということをやりました。ですから、真つサラの原稿と誰かがワーツと手を入れてズタズタに切った原稿と、両方今でも保存しております。これがなぜ大事かと言うと若い研究者や助手の方たちの業績に将来なるからです。本になつた沿革史そのものには、第何章、第何節を書いたなんて一行も記されませんから、その時に、本当にこれは君が書いたのか、なんて言われたら大変な迷惑を本人が被ります。ですから、両方とも証明できる方法を作っておこうというふうに致しました。その代わり、提出稿をどんなに直されても、直された方は文句を言わないということもまた決まっております。直した原稿と、もとの原稿

とがちゃんと残っています。東京大学史料室に行つて御覧になると、羽田貴史という署名の載つた原稿はもちろんのこと、寺崎昌男という署名の載つた原稿だつて、真つ赤つ赤になおされています。その校訂作業は、三人だけの、少数の方に全部任せたんですね。

ただ任せただけで済むことばかりではありませんでした。今度は他の人の原稿が廻つてきて、「委員長、これはどう見ても駄目だから、この章は全部先生がはじめから書きなおして下さい」などと叫ばれて、引き取つちやつたところもあるんですね。私などは実際は何枚書いたんでしょうね。兎に角、大学に届け出た執筆枚数は八八〇枚でございます。しかしとてもそれじゃ終わりませんでしたね、実際は。ところで、こちらでは原稿料は決まってるんですか。

(頼)

原稿料はなしです。

(寺崎)

なしですか。東大もなきに等しかったんです。四百字五百円ですから。

(頼)

もらわん方が気分がいいですね。

(寺崎)

その通りです。五百円の八八〇倍でしょう。四十四万円です。十二

年間で四十四万円。途中では同僚や学生たちに、物凄く金もらつてると思われてたらしいんです。だって東大の寄付金が五十億円集めるといふ触れ込みで、その一環です。「相当金をもらつてると思つてました」なんて、同僚の教授から言われたんですよ。とんでもない。学生たちにも、最後には腹が立ったから言つたんですよ。「君たち、四十四万円というのと多いと思うかもしれないけど、十二年間で四十四万円のバイトがあつたらやるか」つて言つたら、「いや、やりません」つて。何でこんなこと私は言つたのかというと、校訂作業が大変ということから思い出したんです。つまり、やつたことが業績になるようなメリットがないとこの仕事は引き合わないということです。この辺非常に大事な部分だと思えますね。

### 基幹史料の大切さ

東大百年史をやつた時に勉強させられたことの一つは、学内基幹資料というものを確認して、押さえておく必要があるということです。国史の人たちの感覚には、非常に敬服しましたね。彼らは一番の基幹資料は何かということから、判断をはじめます。そうすると、東大の場合は明らかに『評議会議事録』でございます。帝国大学評議会記録から始まつて、東京帝大、東京大学というふうに変わっていく評議会記録とその関係資料、これがやはり基幹資料なんです。それを縦にザーツと分析していくと、大きくは外れない。そして足りないところを周りの資料で補っていく、ということなんです。

その次の基幹資料は何かというと、国立大学の場合、内閣文書でございませぬ。公文書館、国立公文書館に保存されている内閣文書、及びその関係の文部省関係の雑資料、これが基幹資料の一つです。最近はその間にプラスして入ってきてるのが、羽田さんたちがよく使っている占領改革文書ですね。GHQ/SCAP文書です。この三つが大事だと思えます。逆にいうとそこを縦に押さえておけば、かなりのことが書けると思えます。

東大の場合は伊藤隆さんが中心になって、若手の編集室員を集めて、『評議会議事録』全部の分析を、研究会としてやりました。これは良かったですね。年度ごとに交代で、どんな案件についてどういう話があったか、兎に角、積み上げていくことをやりました。それは百年史の大事な基礎になって参りました。そうやって、丹念に読んでみると、きちっと押さえるべき材料がのってるんですね。まず基幹資料の判断とその体系的分析、これが骨だというのが彼らから教わりました。それと伊藤隆氏の一番得意なヒアリングですね。オーラルヒストリーの方法。この二つを見ていて、ああ、彼らは足腰が強いなという印象を非常に強く持って、勉強になりました。

立教はどうかというと、立教は最近先程申しました『立教学院百年史』に続く作業として、いま『百二十五年史 資料編』の刊行を続けています。すでに一巻と二巻が出ました。いろんな事情があつて、いきなり通史を書くわけにはなかなかいかない。それより、資料編の方が先じゃないか、それもなるべく皆に読んでもらえるような資料集を作りたい。そこで、官庁資料集のようなものじゃなくて、解説に沿っ

て資料を読んでいくと歴史が掴めるようなリーダブルな資料集を作りたいということになりました。これがいま二巻まで出ております。羽田さんが買って下さいました？ それは、ありがとうございます。赤字だつて学院長はブーブー言ってるんですよ。あれは割におもしろかつたでしょ、自由に資料を入れてありますから。そんな形で資料を利用するようなトレンドも出てきたということですね。

ただ、きついのは、私学は基幹資料が少ないんです。戦前の理事会議事録なんてものが私学できちつと残ってるというところは本当に少ない。ですから、肝腎かなめなことで分らないことが少なくないのです。

例えば、私がおりました教職課程の認可の日というものも、とんと分りません。これまでどの資料を見ても分からないというようなことで、基幹資料の少なさという点が私学は致命的でございます。この点、国立大学はかなり恵まれていると思えますね。

ところで、私は立教の資料編の中で「進学案内書と受験雑誌にあらわれた立教学院」というのを第一巻の一番後ろの章で書いたんです。これは私が提案いたしました。へ外から見た立教」という発想で資料を集めてみたいと言ったんです。進学案内書というのを熱心に研究しておられる方がありまして、その方のおかげで戦前刊のほとんどの文献を見ることが今はできるようになってるんです。他方で昭和期になりますと、大学評判記や学校評判記というのが出されてくる。それから、もう一つはずっと刊行されている受験雑誌です。大正年間に創刊された研究社の『受験と学生』、昭和になって出た、欧文社の『受

「驗旬報」。太平洋戦争が始まった年に、欧文社の「欧」という字をヨーロッパの欧から「旺」に変え、そして、誌名も『螢雪時代』というものに変わったんです。私は旺文社と研究社の資料室に見せてもらいに行きました。立教に関する記事があったら、全部拾ってくるようにと頑張ったんですけどね、なかなか出てこない。広島は諸学校は出てくると思います。真剣に当たられるといいと思います。学校評判記とか、そういうのにも恐らく出てくるだろうと思います。

それから、教育関係のもろもろの雑誌が今は非常にたやすくアプローチできるようになっております。それらのなかにあらわれた例えば広島高等師範学校ないし広島文理科大学の関係記事とかを一遍、悉皆で集めておくといいと思います。

私は悉皆で集めました。集めたと言ったって、立教はほとんど出てこないですから、五センチくらいのファイル二冊だけです。山のように出てくる学校もあるわけです。それは大抵、官公立の専門学校、それから旧制高校です。これはいっぱい出てきます。慶應、早稲田といえども、たとえば早稲田高等学院、慶應義塾大学予科、これらさえも出てこない。戦前の私学は、決して進学競争の対象ではなかったというところが、受験雑誌をみると非常に良く分かります。立教大学予科の進学競争率が例えば昭和十二年ぐらいには、一・五倍なんです。誰でも入れたんですね。慶應がせいぜい二・三倍ぐらい。とても戦後の今とは比較にならない。そのこと自体が、一つの事実でございます。こういうことを通覧してみると、〈外から見た立教大学〉というのが非常によく分かってきました。その部分を勤務の長い先生方に読

んでもらいますと、出てくる答えが一致しています。「今もこれは同じですよ」。

かつて、東京六大学野球連盟が生まれた頃、立教大学は非常に強く、優勝を繰り返していました。リーグの開始は大正十四年で、そのちよつと後でプロ野球が生まれたんですから、プロ野球発生前の学生野球は大ニュースになるわけです。立教はそこで何遍も優勝していますから、いきなり有名になったわけです。学校評判記などを見てもみると、「野球だけは強い立教大学、でも野球を除いたら他に何が残るであろう」なんて書いてあるわけです。そういうことは当時から言われていたわけです。外から見た歴史は非常に大事だと思います。広大的場合も中国地方の地域新聞とか、或いは雑誌、それから教育会などが出していた雑誌とか、そういうものも含めて、是非おあたりになるといいと思います。

広大に関して言いますとこのほかにも新しいアプローチ、楽しいアプローチがこれからできるだろうと思うんです。例えば、卒業生の進路とか、入ってくる学生たちのリクルート基盤、これの分析は割に今良くできるんじゃないかと思えますね。最近の数十年が恐らく焦点になるでしょうが、最近の数十年間、特にこの二十五年間ぐらいの広島大学は大変動を受けてきていると思うんです。その間に例えば、国立大学で共通一次テストも施行された。その前と後とは、恐らく広大に來る学生たちのリクルート基盤に相当な変化があったに違いない。従来はせいぜいのところ男女比ぐらいしかしてないんですけど、もつとやっけていったら、恐らく広島大学を支える大きいシステムが分かっ

てくるんじゃないかと思えます。それから、国際化の動向もすごく盛んです。従来は例えば東大でやれたのはせいぜいのところ留学生数の変化ぐらいのものです。でも、これから広島大学の場合だとその辺は非常にもしろいプロジェクトになる。西条への移転だって、大きいテーマになると思います。こういう新しいテーマを新しいアプローチで進めていける可能性がたぶんあるんじゃないかと思えます。

### 「事件」の扱い方

関連して思い出しますのは、「事件」です。事件をどう扱うかということは、やはり合意を作っておかれた方がいいように思います。苦しいことですが、それは大事じゃないか。二十五年史の時の紛争の扱い方についての合意をもう一遍再確認すればいいですからね。

(頼)

もう、事実だけで、まったく評価なしでした。

(寺崎)

私たちも評価は書きませんでした。

(頼)

資料編で入れました。

(寺崎)

東大では、大学側の対応に限るということで書いたんです。学生運動の歴史は学生の側でむしろ作るべきだろう、こちらは大学の対応に限定するということ。ただ、困るのはスキャンダラスな事件ですね。総合科学部の、ああいう事件の書き方などは、やはりかなり難しいと思います。同じスキャンダラスといっても、例えば立教では大場助教授事件というのが十九七三年に起きたんです。今で言えば一大セクハラ事件です。本人は、石廊崎から一家心中で身を投げて死んだ。大学院生の女子学生を殺したことは分かった。ところが遺体が見つからない。さんざん探した後で八王寺の本人の指導教授の別荘の庭から出てきたんです。これは大事件なんです。ただ、どう書くかになると難しい。さっきの資料集にも、さすがにこの事件の資料は載っておりません。総じて「事件」の取り上げ方についての申し合わせをどうするかということがあると思います。

### 大学史刊行の意義は何か

大学史、沿革史編纂の意義について、当時から今も一貫して考えていることを申し上げます。

第一に、学術史、教育史、教員養成史、イギリスで言えばインテレクチャル・ヒストリーとでも言いますが、そういうものにとつて個別大学沿革史は非常に大事だということは言うまでもないことです。それから、もっと広くいえば、政治史、経済史、或いは文化史、特に人

物研究にとつても貴重で、この辺になりますと、年史が出たというだけじゃだめで、史料室が続かないといけないと思います。終わった後、資料は全部段ボールに入れて二〇年間置いてありますというんじゃない資料が死ぬし、意義も消えると思いますね。何としてでも大学は史料室を残させる必要がある。これは大学の社会的責任の一つだというぐらいに私は思っています。東大でも三人の歴代総長を口説いて、やつと史料室が出来て、助手ポストが一人付いております。今はまあ、そういう貧弱な状態です。でも、あるに越したことはないというか、今はもうそこに回さないと分からない問い合わせがいっぱいあつて、不可欠の機関になっているわけです。

もう一つは、年史編纂は最近出てきた自己点検の一環たるべき作業だということがあります。これは極めて大事で、私の言葉で言えば、大学沿革史編纂というの是最もスパンの長い自己点検の作業であると思います。どうして大学審議会などが自己点検評価のサンプルを出すときに、「きちんとした沿革史を刊行しているか」とか、「きちんと資料を保存する体制を整えているか」といった項目を出さないんだらうと、私はいつも不思議に思っております。アメリカに行つたときに分かりましたが、アメリカの大学の九六パーセントぐらいは、アーカイヴズをもっているんですね。ユニバーシティ・アンド・カレッジ・アーカイヴズというのは、全米アーキビスト協会の中の一大組織になっています。ジュニア・カレッジとかコミュニティ・カレッジというところでもきちつとアーカイヴズを持っていて、誰かが応対してくれます。

### 存在理由の確認

この前、日経新聞のある人も出てる席で、「学校沿革史をどう編纂するか」ということについて話をしました。小学校、中学校、高校などを含めた学校沿革史全般のことについて話したんですが、日経の人が非常に率直な質問をして下さったんです。それは「会社史というのは何を書くかというのと、その会社の発展の歴史を書く。それが会社史の編集目的です。で、大学史というのは何を書くんですか」という質問でした。そういわれると直ぐに、「いや、やっぱり発展の歴史ですよ」というのも何か言い足りないような気がして、その場にいた大学関係者たちとも意見を交換しました。そして出た結論は「その大学の存在理由を証明する仕事じゃないだろうか」ということでした。

「何のためにわれわれの大学はここにあるのか、何のために我々はこんな大学を作つてやってきているのか」。その証明がやっぱり一番大事なことじゃないかと。来ている方の半数ぐらひは、私学の職員でした。だからそういう意見が特に強く出たのかもしれない。けれども国立の場合も「存在証明の記録としての沿革史」という目標を立てていいと思うんですね。我々は沿革史編纂の学問化とか、アカデミック化というようなことを言ってきたんですけども、それだけじゃ十分でないところがある。

最近ではステージがまた変わりつつあると思います。ひとつは、大学改革が今や日常茶飯の仕事になってきたということです。その中で考

えますと、大学の沿革史をふりかえって見るとき、その大学が変動期毎に取ってきた選択の歴史が分かるんですね。どういう道を選択してきたかという道筋を辿っていきますと、やはり各大学の否定しがたい個性が浮かぶ。逆にそのことが分かるような編集がなされ、内容が出ていれば、その沿革史は成功しているということになります。

その前提として必要なのが「実証」という方法じゃないでしょうか。その方法がしっかりしてないと、選択の歴史も分からないということになります。ですから、両者相俟って大学の存在理由を明らかにするために、「選択の歴史的検証を行う」という意識の再確認が、今必要とされていると思うんです。今どの大学でもさまざまな決断を迫られている。その時に沿革史はものすごく大事なヒントを与えてくれると思います。

### 歴史情報の利用と公開

次が情報公開法の制定であります。これも非常に大きいと思います。国立大学は特にひとごとではない。私はある大学から相談を受けてヒントになることを言ってくれていわれたので、「情報公開法の制定は、大学沿革史編纂や大学史史料の収集にとっては黒船だと思う」と言っただんです。むかしはこれが言えませんでした。私どもが東大百年史を完成したころは、情報公開などとうっかり言う、「大丈夫ですか」という懸念がいっぱい出て来ました。「プライバシーに引っかけりませんか」とか、「機密がもれませんか」とか、「学生から批判されませ

んか」とか。あの頃はこれを表に出したら、大学はびびりました。今は違う。これは義務になってきたわけです。

私の言葉で言うと、大学の持つ情報には歴史情報と現代情報とがあるんじゃないでしょうか。今オープンになることを求められている大多数のものは、現代情報の方です。ところが、現代情報は忽ち歴史情報に変化致します。その受け渡しの仕方をルール化し、歴史情報と化した、あるいは化すべき現代情報を整理保管する方法を考える必要があります。そういう点で、今の情報公開システムというものを、法律まで出来るんですから、それに沿う形で史料部門を強化しておくことが大事です。昔はこれが言えなかったんです。もう、ただたださっき言いましたように、学術史、教育史のために大事ですよとか、人物研究のために役に立ちますよとか、これだけしか言えませんでしたけれども、今は違います。歴史情報の公開は、国立大学のいわば社会的責務の一部となってきたということなんです。

### 大学史刊行は広報機能を持つ

それからもうひとつは、広報機能の一環になるということでありま。す。いい沿革史を作っていけば、良質のPR素材になる。使えるということであります。

余談になつて恐縮なんですけれど、この前羽田さんには一冊プレゼントしておいたので、御覧になった方もいらつしやると思いますが、ここに持ってきたのは『武蔵野美術大学六十年史への招待』というパ



ンフレットです。私が書いたものです。この大学でいい沿革史が出たんです。それを頂きまして、これについて教員相手の講演会を開くから読後感を言えって頼まれたわけです。そこでお話を致しました。もしたら、今日あなたが話したことを、学生向けに書き下ろしてもらえないかって言われて、書き下ろしたんです。学生に分かるようにと思っ  
て、「美しい大学史」とか、「シヨート・ヒストリー」とか、「正直な歴史」というような章から成る、分かりやすい本を書いて出しました。その後、武蔵野美大がこれを使っておられるかといいますが、新入生に全部配っているんだそうです。また併せて『武蔵野美術大学六十年史』の普及版を作り、それにこの冊子を付けて、設備備品の寄付募集を保護者に送ったんだそうです。そしてら寄付の申し込みが急に多くなったんだそうです。以後毎年毎年これが出るわけです。その間に実に私の肩書きが三度変わって、隠れたベストセラーです。これが第三刷。一九九二年九月二日第一刷。九七年五月三十日第三刷。この前、新しい肩書きを教えて頂きたいとまた調査が来ましたから、今の肩書きが載って第四刷になるでしょう。

こういう活動がなぜいいかというと、親が大学のことをはじめて知るからです。息子や娘が武蔵野美術大学に行ったところで、親としてはたとえば多摩美術大学と武蔵野美術大学とどう違うのか、たぶんぴんと分からない。ところがそこへ、子どもの行った大学からこんな沿革史が出てくる。しかもよその大学の先生が来てその年史のことについて書いて書いている。大変効果的だったんじゃないかと思えますね。大学沿革史がPRの大事な素材になるということの典型例です。また

これは、大学の存在理由を父母、学生と共有する作業でもあると思います。

もう一つの余談を申し上げますと、沿革史は学生の教育にも役に立つ。これは私が最近体験いたしました。

去年、立教大学は全学共通カリキュラムというのを発足させて、言語教育と教養教育の両方の新しいスタイルをとにかく作り上げたわけです。私はその企画の責任者をさせられたんですけれども、作った手前、総合科目の一つを受け持ったんです。「大学論を読む」という半年間の講義、総合科目二単位ですけれども、それを受け持って授業をしました。最初はカントの大学論までは無理かもしれないけど、もうちょっと後の現代的な大学論を読むということをやろうかと思いましたが、聴講生が五〇人ばかりいて、ゼミにはならず、やっていくうちに半年しかないということに気が付いて、そんな試みは放棄いたしまして、「今の大学はどうやってできたか」といった話から始めたわけです。学生たちが少しづつ興味を持ちだしてきました。私はひよつと思いつきました、そうだ、この学生たちは立教のことについて知っているだろうか。そこで、「立教大学について考える、というのをこれからやってみよう、お互い一番良く知っているのは立教だからね」と言った上で、「ひよつとして、君たちの中には何人か不本意入学者もいるかもしれないけども」って言ったんです。この一言でサーツと彼らの表情が変わりました。大部分が不本意入学者なんです。早稲田に行きたかった、慶應に行きたかった、上智に行きたかった、東大に落ちた、本当は埼玉大学の方が良かったかもしれない、こういうよう

な学生もいっぱいいるわけです。そういう不本意で入ってきた人にも、「立教ってどんな大学か、せっかく学費払ってここにいるんだから、どうか聞いてほしいと思う」と言つて、「立教とは何か」をしゃべりはじめたんですね。そしたら、向こうの乗り方が凄いですよ、目を輝かせて聞く。だんだんこつちも乗ってきました、歴史を全部しゃべっちゃったんです。

始まりはいつで、例えば明治三十二年の訓令十二号事件すなわちキリスト教教育をやっちゃいけないという方針に対して、立教は例えば明治学院、同志社、青山学院とどう違つたか。どうやって大学になつたか。戦時中はどうだったか。戦後なぜ立教の教授たちが十二人もマツカーサーから追放されたのか。大学紛争はどうだったのか。それから、大場事件って起こつたけど君たち知ってるか。全然知りません。これも事細かに話してやりました。で、「七〇年代後半、例えば日本で社会人入試という言葉をとにかく定着させたのはこの立教の法学部だった。それが七八年からだ。もう一つは、長考できる論文入試、すなわち文Bと言っている小論文方式を最初に導入したのも立教の文学部で、七〇年代後半は少なくとも大学を変えていく立教と言われていた。今はどうか。だんだん駄目になってきたんじゃないか。君たちは立教に何か言いたいことがあるんなら、僕が取り次いであげるから、本当の気持ちを感じるところに書いて出さない」という講義をやりました。ところがその反響は思いもよらない程良かったんです。反響がよかつたものですから、また後半、今度は文学部の中の共通科目七〇人ぐらゐを対象に、今度は意識的に三時間かけて「立教大学を考える」(一)

(二)(三) というのをやりました。これも反響はよかつた。どうしてか。

反応を見ると分かるんですよ、彼らは居場所を確かめたかったのです。自分の居場所を。また、「私とは何か」という問いが今彼らが問うている問いなのです。学生たちは、アイデンティティを確かめる前提として、自分のいるところを確かめたんですね。ところがその自分のいるところについて持つてる情報は、入試偏差値ぐらゐしかないので。また親の薦め位しかない、自分は不本意入学で入つてきてると、こう思っています。ところが不本意入学と言つたつて、日本全国の学生は皆不本意入学者かも知れない。東大におりました頃に痛感したんですが、文II(経済学部進学)の学生が満足して、ルンルンしているかというそんなことはないわけです。本当は文I(法学部)に行きたかつたというのが何割か必ずいる。理科II類(農学部、薬学部進学)の学生はI類(理学部、工学部進学)を受けたかつたけど偏差値が及ばなかつた。その理Iの学生は本当は理III(医学部進学)に行きたかつたと思つてるという話になるわけです。そういう中で「僕に合う偏差値はこゝしありませんでしたからね」といった調子で理IIIに入ってきた学生たちは、「いい医者になろうね」なんて医学部の教授が言う、「別に」といった返事をして教授たちを激怒させるわけです。

立教での反響を、全部読んでいたぐらいです。例えば、「私は日本文学科四年生です、立教がいやでいやでたまりませんでした。就職がもう内定して、このまま卒業していこうと思つていました。

けれども、先生の話を聞いてこの大学を見直しました。好きになりました。こうやって卒業させてもらうことは有り難いと思う」。それから「今日は誰も友達の知らない、この立教のことを聞いて、私は誇らしい気持ちです。自慢してやりたいと思います」。もう、全部そんなような感想なんです。あれぐらい反応のいいテーマはありませんでした。で、私は思いました。このテーマを一人でやるのは重いと。例えば経済学部の教授が一人いて、立教大学というのを語ったらどういふことになるだろうか。全然違う発想で語ってくれるに違いない。理学部の先生だったらまた違う発想でやってくれるだろう。これは総合科目にすべきだと思いましたがね。職員の方がやってくれたっていいわけです、図書館の人がやっても構わない。それは、大事な作業ではないかと思いました。

講義で頼りになったのは、資料集でございませう。さっきのべました確実な資料を学生たちに教材として与えることができる。マッカーサーの指令でも、それから訓令十二号事件に関する資料でも、全部私は配りました。そうすると、学生は安心いたします。改めて思ったのは、入学式の時の学長の訓話というようなのは何の教育的効果もないということでもあります。やる方は大変だと思えますけれどもね。我が立教大学はかつて明治七年築地に生まれました、それが今発展してこうなりましたって語っておられるけれども、覚えている学生はほとんどいないということなんです。それはなぜかというところ、そういう挨拶には「批判」がないからです。私は、批判を込めて、歴史研究者としての目で、立教の話をしました。ですから、例えば立教と青学の違いを言える

わけです。キリスト教系学校全体をミッションスクールなどという概念で括っていいけない、というようなことも言えるわけです。それは、学生にとっては極めて大事な情報だと思います。

大学の個性とは、そういう中で、お互い認識できるものじゃないかと思えます。大学の個性が学生たちに納得された時、実は学生は自分の居場所を見出すことができると思います。そのための役に立つというのも沿革史の効用の一つではないでしょうか。それでは終わらせていただきます

(羽田幹事)

どうもありがとうございました。司会をさせて頂きます。五十年史の羽田です。五十年史も年史編纂をどうするかというイメージづくりの段階なんですけれども、非常に立派な分厚いいろいろな大学の年史があつて、学長室や図書館にあつても、ほとんど読まれないのが現状です。こういうイメージでいいのかなという思いを持っておりますので、今のお話は大学史の概念くださいますか、いろんなアイデアと示唆に富むものであつたと思います。

あと、二十五分ほど時間がございませう。ここには、部局誌とか或いは五十年史編纂の委員会に関わる方々がいらつしゃいませうので、いろいろ御質問を頂いたり、御意見を伺つたりという時間にしたと思います。どなたでも結構ですので御発言いただけたらと思います。なお御発言の際には所属と、多少なりとも大学史編纂との関わりのおおしやうつしてください。

(紺谷浩司氏〔法学部〕)

法学部の紺谷と申します。歴史に関しては素人なものですから、先生今日のお話は非常に興味深く聞かせていただきました。ちよつとおうかがいしたいと思えますのは、最後のところですね、現代情報と歴史情報に関連して。今あるものでも、もう一瞬後には歴史情報になつてしまいますね。それで、残すべき歴史情報としてどういうものを選ぶべきかという問題、その時の、指導理念といましようか、それをどうやって見出すか。判決原本の一時保管ということで、ちよつと広大の方で関係しているものですから、裁判所は今司法資料の保存ということに対する関心がまるつきり欠けている、こういう資料を残すべきかということはほとんど考えていないようですね。このあたりはどのようにすべきか、何かお考えを聞かせていただければ幸いです。

(寺崎)

判決原本のことは、今青山善充先生がやっておられるんですね、このまえお書きになったものを読みました。現代資料としての性格を濃厚に持つ歴史資料だと思います。勿論、保存しておくことが大切だと思いました。

(紺谷)

これは国の機関として精力的にどこか一ヶ所に集めるといふふうになつた方がいいのでしょうか。

(寺崎)

司法公文書館というのを作りたいわけですね。

(紺谷)

はい。ですが、現状では財政事情からみても、それはちよつと無理なようで、国立公文書館を法律で根拠づけてそこにに入れてもらうという形で。

(寺崎)

この場合は一ヶ所である方が絶対がいいと思います。

大学文書のことに戻りますと、これは少なくとも一大学の中では一ヶ所がいい。部局で現有される文書は現用文書とか行政文書とかって普通段言つてるようですが、その、現用文書の保存規程がございします。ものによつて永久保存と廃棄とがあります。部局における保存の期間を決めておいて、この期間を過ぎたものは機械的に中央の方に移してしまう。その保存の可否は中央で決める。ここで中央というのは、例えば広島大学文書館というのが仮にあるとしますと、そのことで、保存の可否はそこで決めるということではないでしょうか。

その任せ方は、これもいろいろありますね。アメリカのMITのアーキビストがやってたレクチャーを聞きますと、女性でしたけど、彼女ははつきりと、各部局でどういう資料があるかインフォメーションをつかむのがまずアーキビストの仕事だということです。次に物としての文書を仮に受け取つた場合、これを捨てるべきか保存すべきかを

決めるのも、また我々の判断だといっていました。非常に高いプロフェッショナル意識を持っています。ミネソタ大学のアーカイブに行きましたときは、びっくりしましたね。ミネソタ大学の研究及び教育に関する基本資料を保存しておくというんですね。ファイルがあつてバイオロジィというのがある。私は聞いたんです、昔の時間割りは保存してますか。昔つていつ頃かつて聞いてくるから、例えば一九二〇年代ごろつていったら、あ、ある。ぴしつと引き出してくれました。

従来の発想で部局だけに任せていたら、時間割りごときは一年経つたらいらぬですよ。全部捨ててしまう。当該部局においてすら、一年経つたら歴史情報になるんです。「一年経つたら必ずよこしてくれ」ということで中央で持つておかないといけない。

(紺谷)

そのときには、その中央の担当者の見識というのは、これはまた重要な問題になってまいりますね。選んで捨てちゃつたらおしまいですから。

(寺崎)

その通りだと思います。シカゴ大学は、仙波さん行かれたことないですか。

(仙波克也氏〔教育学部〕)

資料館は行ったことがありますが、そんな詳しいことは分かりません。

(寺崎)

あそのアーカイブに行きましたらね、これはえらい原則がありまして、自分たちはトラスティ、理事会の文書のアーキビストだつて言うんですよ。だから、理事会とそれに関係したいろんな資料は完璧に保存しているわけです。ジョン・デューイという教育哲学者がいまですね、かれが作ったシカゴ大学の教育学部附属学校が有名なんです。そこで、ジョン・デューイが附属学校を作ったときに理事会に出した手紙なんてないだろうかつて言つたら、一発で出てきました。理事会関係の記録ですから、彼らはそれを保存しておくのが責務なんです。頼んだ私の方が検索の余りのスムーズさにびっくりしました。

(仙波)

私が見たいものではハッチンズ関係のものもあると思います。

(寺崎)

あるとおもいますね、ハッチンズが学長でしたよね、あれが理事会との間に交わした文書や書簡とかはあると思います。アーカイブスが責任持つてますから。ハッチンズ自身のコレクションもきつとあると思います。そこまでは、自分たちの直接責任とは思っていないでしょうが、寄贈したら恐らく保存しておくでしょうね。

(頼)

お聞きして元気が出て、二十五年前に聞いていたら、もうちょっと

本気でやっつたんじゃないかと思いました。あの時とは情勢が違うというお話もあったんですが、ちょうど年史の編集作業をやっている、生物生産学部にいらっしやった山谷先生、頼君いいね、こんな業績がつめるような仕事の専属になってといわれました。僕はもう歴史が専門なのに、何でこんな余技みたいなことで業績になるんかいって、先生に食って掛かったようなこともあります。それで、こういう仕事がちやんとした業績になるという状況になって、本気でやれるというのは非常に変わっているように思いましたね。大学史でそういうことができるということですね。だからまあ本当にそういうつもりで、執筆、資料の編集等やられたら、これ非常に意味のある仕事、いやいやながらじゃなく、楽しくやれるような時代だなというように感じました。

それで、いろいろ参考になりました。今回の広大の場合は来年の五十周年のために、一応図録と年表を出して、それから全学の通史を作ろうということ。それから部局史は、各部局の判断でそれぞれお遣り下さいということに一応なっているんです。楽は楽なんですけども、委員の方が学部から出てらっしゃるけれども、なかなか全学的なピアー、合意とかは、非常に難しい。予算的なこともありますし。こういう集まりだったらもう、それこそ、合意してそうだそうだということになるんですけど、非常に難しいところがあります。事務局の協力も大変必要ですが、予算的な問題があったりなかなか難しい。まあ、全学共通経費の支出ということになりますから。東大あたり百億集めるということで予算的には楽だったようですね。

(寺崎)

五十億円が目標でしたが、実際に集まったのはもっと少なかったと聞いています。そしてそのなかで僕らはどれくらい使っているのかというの、最後まで分かりませんでした。

(頼)

でも、これがあるといったら認めてくれたんですね。

(寺崎)

そう、それがよかったですね。金よりもむしろ中身です。

少なくともはじめのうちは、学部ごとに温度差があるというような程度じゃなかったんです。温度がないんですから、びっくりしましたね。何人かが燃えなければ仕方がないということです。やっとなんて認めてくれたのは第一巻を出したときです。あ、編集室は本当のものをさうとしてんだと皆思ったんですね。

(頼)

だから、推進グループのお話で、確かにこれは一番大事なお話ですけど、

(寺崎)

推進グループだけじゃできないんですよ。しかしそれがなければできないのです。それがきつい。

(羽田)

推進グループの方から何かありませんか。

(寺崎)

頼先生がおっしゃったように編纂刊行の仕事が業績になる時代がやってきたんです。昔は「生け贄」って感じでしたからね。

(頼)

まあ、余技でやっとするから。

(寺崎)

「好きでやってるんだね」というか。

(頼)

だから、この間も話したけど、僕なんかは業績目録は何度も提出したけど、一度もその中に書いたことないですね。

(寺崎)

でしょうね。

(頼)

山谷先生あたりの発言は、案外先進的であったかもしれないですね。もう、そういうものを早くからちゃんと認めて。

(寺崎)

山谷さんは東大の大学院の総合的な研究科構成がもう一度細分化してしまつたときの背景について綿密な調査をやっておられる。つまりご自分は歴史をやっていて、誰かにあれは余技をやってると言われたことがあるのではないのでしょうか。これでは駄目だと思って、怒りながらやってるもんだから、さっき言われたような判断になるんですね。懐かしいですね。

(羽田)

それでは、もう時間もよろしいようですし、懇親会でいろいろとまたお話をうかがえると思いますので、講演会はこれで終わりたいと思います。またいろいろな形で御指導お願いすることになるかと思えますけれども、よろしく願います。それでは、先生ありがとうございました。

(てらさき まさお)

桜美林大学大学院教授・大学教育研究所長、東京大学名誉教授

本稿は広島大学五十年史編集室主催第二回研究会（一九九八年七月十三日）において行なわれた講演を文章化したものです。大学史編集に示唆を与える貴重な内容であり、あらためて寺崎教授に感謝します。

(広島大学五十年史編集室)